

レクイエム 猫と肖像と一人の画家

Requiem: Cats, Portraits, and Yokoo Tadanori

2024年9月14日(土) ~12月15日(日)

■開館時間

10:00~18:00

※入場は17:30まで

■休館日

月曜日

※ただし9月16日(月・祝)、9月23日(月・振休)、
10月14日(月・祝)、11月4日(月・振休)は開館
9月17日(火)、9月24日(火)、10月15日(火)
11月5日(火)は休館

■会場

横尾忠則現代美術館



横尾忠則《タマ、帰っておいで 019 自宅にて》
2014年 | 33.3x24.2cm | アクリル・布 | 個人蔵

展覧会について

「死」を見つめ、描き続けてきた横尾忠則が、これまでに見送ってきた親しい人々と愛猫に想いを馳せる展覧会です。

「肖像」の部屋では、家族や友人をはじめ、横尾の生き方や創作に影響を与えた人々の肖像画や関連資料を紹介。文学、音楽、演劇など領域を横断して活躍する作家ならではの協働の痕跡を、横尾自身の言葉とともに振り返ります。

「猫」の部屋では、愛猫タマを偲んで描いた「タマ、帰っておいで」シリーズのほか、在りし日のタマの写真やスケッチを一堂に展示します。

愛しい者たちが彼岸と此岸を往来し、時空を超えて共存するヨコオワールドをご体感ください。

家族・故郷

横尾忠則は1936年6月27日、兵庫県多可郡西脇町に成瀬光政・ツヨの次男として生まれ、3歳の時、光政の実兄で呉服商を営む横尾誠起の養子となった。自身が養子であることを知らされないまま一人っ子として愛情を一身に受けて育ったこと、一般的な親子より歳が離れている養父母の死を恐れていたことが、自身の人格形成に大きく影響していると横尾は語っている。

故郷・西脇は、横尾の創作の原点である。しかし、自身の存在と密接不可分な関係性ゆえに1960年の上京以来、距離を置いていたという。10年以上帰郷していなかった横尾が故郷を訪れたのは、横尾の恩師や同窓生、思い出の場所を篠山紀信が撮影するという、雑誌の企画のためであった。

それから30年後の2000年、西脇市岡之山美術館での個展「西脇・記憶の光景展」の出品作を現地で制作するため、横尾は西脇に約2週間滞在した。この時、懐かしい線路の風景に、他界した同窓生の姿を重ねた作品が生まれた。本展出品作《友の不在を思う》は、その後に旅立った友人たちを描き加えたもの。故郷の思い出を共有した友人たちへの供養の儀式なのだろう。



横尾忠則《家族の会合》 2021年
161.1×130.3cm | 油彩・布
横尾忠則現代美術館蔵



横尾忠則《友の不在を思う》 2003年
91.2×72.8cm | 油彩・布
横尾忠則現代美術館蔵

三島由紀夫 1925.1.14-1970.11.25

小説家、劇作家

1947年、東京大学法学部を卒業後、大蔵省に入省するが、翌年退職。1949年『仮面の告白』刊行。主な著書に『潮騒』(1954)、『金閣寺』(1956)など。1970年11月25日、『豊饒の海』第四巻「天人五衰」の最終回原稿を編集者に渡した後、陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地において自決。三島の発案で制作が進められていた横尾との写真集『男の死』(撮影:篠山紀信)は、三島の撮影を終え、横尾分未撮影のままお蔵入りとなっていたが、2020年に三島単独の写真集として日の目を見ることとなった。

横尾にとって三島は「礼節」を説く教育者であった。1966年の横尾の個展パンフレットに「礼節のない無礼な芸術」との作品評を寄せつつ、芸術は本来無礼なものだが、芸術家は無礼であってはいけないと横尾を諭した。三島の死後もその存在は横尾の制作に影響を与え続け、あらゆる年代の作品にその姿を見つけることができる。



横尾忠則《理想の実現》1994年
227.3×181.8cm | 油彩、アクリル・布
兵庫県立美術館蔵

柴田錬三郎 1917.3.26-1978.6.30

小説家

慶應義塾大学文学部在学中より執筆を始め、戦後、編集者を経て文筆活動に専念。1951年、『イエスの裔』で第26回直木賞受賞。1956年より週刊誌に連載された「眠狂四郎」が人気を博し、剣豪小説ブームを巻き起こした。

1972年1月より『週刊プレイボーイ』に連載が開始された「絵草紙 うろつき夜太」では横尾が挿絵を担当。2人は1年間高輪プリンスホテルに滞在し、6ページ4色カラーの挿絵入り連載小説という前代未聞の共同作業に携わった。柴田いわく「一年間で20年分の言葉を口にした」という、この濃密な時間が、小説、挿絵の双方において実験的な作品をつくりだした。小石川にある柴田の墓碑は横尾のデザインである。



横尾忠則《うろつき夜太 II》1993年
38.4×56.2cm | シルクスクリーン・紙
横尾忠則現代美術館蔵

ジョン・レノン 1940.10.9-1980.12.8

音楽家

1960年代から1970年に一世を風靡したロックバンド「ザ・ビートルズ」のメンバーとしてボーカル、ギターを担当。レノン／マッカートニー名義で大半の楽曲の作詞作曲に関わっている。

1969年、芸術家のオノ・ヨーコと結婚。「ベッド・イン」に代表される平和活動イベントを行う。ビートルズ解散後はソロ活動のほか、オノとともにプラスチック・オノ・バンド名義で活動した。代表作にアルバム『ジョンの魂』(1970)、『イマジン』(1971)、シングル『ハッピー・クリスマス(戦争は終わった)』(1971)など。

1980年12月8日、ニューヨークの自宅前で凶弾に倒れた。

横尾はビートルズファンを公言しており、彼らの来日13日前に、法被を着てJALのバッグを手にするメンバーを描いている。1967年のニューヨーク滞在時にはジャスパー・ジョーンズを通じてジョン・レノン、オノ・ヨーコと面会を果たし、オノとの友情は現在も続いている。本展に出品されているTシャツとサイン入りレコードは2人の自宅を訪れた時のプレゼントである。



横尾忠則《Love John Lennon (新評論)》1981年
103.0×72.8cm | オフセット・紙
横尾忠則現代美術館蔵

寺山修司 1935.12.10-1983.5.4

歌人、劇作家

中学、高校生時代より俳句や詩に没頭し、早稲田大学在学時には短歌で頭角を現し、「チェホフ祭」で第2回「短歌研究」新人賞を受賞。以後、脚本、作詞、映画、演劇、評論など多方面で活躍した。主な著作に『われに五月を』(1957)、『田園に死す』(1965)、『書を捨てよ、町へ出よう』(1967)など。

1967年、横尾忠則、東由多加、九條映子らと「見世物の復権」を標榜して演劇実験室「天井桟敷」を設立し、アンクラ演劇ブームを牽引した。

横尾は劇団の定期会員募集ポスターをはじめとするポスターデザインのほか、旗揚げ公演「青森県のせむし男」や、「大山デブコの犯罪」の舞台美術を担当した。また、1983年、寺山の死から半年後に行われた追悼公演「青森県のせむし男」においても美術を手がけた。



横尾忠則《天井桟敷 定期会員募集(天井桟敷)》1967年
103.0×72.8cm | シルクスクリーン・紙
横尾忠則現代美術館蔵

土方巽 1928.3.9-1986.1.21

舞踏家、演出家

1946年、高校卒業後、秋田市のモダン・ダンス研究所にてダンスを学び、翌年上京。1949年、大野一雄の初公演に衝撃を受ける。1959年、津田信敏近代舞踏学校(のちのアスベスト館)を初めて訪れる。同年、ジャン・ジュネの男色を主題とし三島由紀夫の小説タイトルを借用した「禁色」を発表し、物議をかもす。1960年、初のリサイタル「土方巽DANCE EXPERIENCEの会」を開催し、翌年より暗黒舞踏派を称する。その独自の身体表現は前衛芸術の新たなジャンルとなり、土方は「舞踏/Butoh」の創始者として国際的に知られている。

1965年の暗黒舞踏派提携記念公演「バラ色ダンス-A LA MAISON DE M. CIVEÇAWA(澁澤さんの家の方へ)」(演出・振付・出演:土方巽)のポスターは、横尾流アンチモダニズムのデザインを世に知らしめ、以降のアンガラ演劇のポスターに繋がっていく。このポスターの版を利用した《土方巽 燐燐大踏鑑(ガルメラ商会)》(1970)に踊る「燐燐大踏鑑」の文字は三島由紀夫揮毫によるもので、土方の理念を表している。



横尾忠則《A La Maison de M. Civeçawa (ガルメラ商会)》
1965年 | 105.2×73.7cm | シルクスクリーン・紙
横尾忠則現代美術館蔵

高倉健 1931.2.16-2014.11.10

俳優

1956年、『電光空手打ち』の主演として映画デビュー。「網走番外地」シリーズ、「昭和残侠伝」シリーズをはじめとした仁侠映画で不動の人気を誇る。第1回日本アカデミー賞では『幸福の黄色いハンカチ』(1977)、『八甲田山』(1977)で最優秀主演男優賞を受賞。主な出演作に『新幹線大爆破』(1975)、『君よ憤怒の河を渉れ』(1976)、『南極物語』(1983)、『ブラック・レイン』(1989)、『鉄道員(ぽっぽや)』(1999)、『あなたへ』(2012)など。

横尾は高倉のポスターを自主制作するほどの熱狂的高倉ファンであった。そして任侠映画の役ではない実像の「高倉健」にさらに惚れ込んだ。テレビ番組で共演した際は照れて話すことができず、無言の時間が流れたという。

1969年にはその思いが昂じて写真集『高倉健賛江』(天声出版)を編集するも出版に至らず、1971年に新たに編集した『憂魂、高倉健』が発行された。しかし、これも諸事情で書店に並ぶことはなく、2009年に復刻版が完成した。



横尾忠則《切断された小指に捧げるバラード(八九三書房)》
1966年 | 102.6×72.0cm | シルクスクリーン・紙
横尾忠則現代美術館蔵

和田誠 1936.4.10-2019.10.7

グラフィックデザイナー、イラストレーター

1959年、広告制作会社「ライトパブリシティ」に入社。1964年、宇野亞喜良、横尾忠則らと東京イラストレーターズ・クラブを結成。1977年より『週刊文春』の表紙イラストレーションを42年間手がけた。

グラフィックデザインやイラストレーションの仕事だけでなく、絵本やエッセイなどの著作も多い。また、音楽や映画に造詣が深く、映画『麻雀放浪記』(1984)や『快盗ルビイ』(1988)など映画監督としても高い評価を得ている。

1965年より1995年まで雑誌『話の特集』のアートディレクションを担当し、創刊号の表紙に横尾を抜擢した。強烈な個性ゆえ賛否両論であったものの、和田はその才能を信じて押し通したという。編集長は矢崎泰久、執筆陣に寺山修司、永六輔、写真に篠山紀信、立木義浩、イラストレーションに宇野亞喜良、長新太らを迎え、ジャンルを超えて様々な表現者が集結し、カウンターカルチャーを代表する雑誌であった。



横尾忠則、和田誠《ヨーロッパ観光ポスター集『デザイン』No.69 [原画]》1965年
51.4×36.3cm | インク、カラーインク、アクリル・紙
横尾忠則氏蔵 | ©Yokoo Tadanori ©Wada Makoto

瀬戸内寂聴 1922.5.15-2021.11.9

小説家、僧侶

1957年、『女子大生・曲愛玲』で瀬戸内晴美として作家活動を開始。1973年、平泉中尊寺で得度し、1974年、京都・嵯峨野に寂庵を開く。1987年から2005年まで、岩手県浄法寺町(現・二戸市)の天台寺住職を務めた。

著書に『源氏物語』の現代語訳、『夏の終り』(1963)、『美は乱調にあり』(1966)、『花に問え』(1992)、『場所』(2001)、『いのち』(2017)など。

横尾とは半世紀以上にわたって親交があり、新聞連載の小説『幻花』(1974-75)、『愛死』(1993-94)、エッセイ『奇縁まんたら』(2007-11)の挿絵や、多くの著書の装幀を横尾が手がけている。

また、瀬戸内は横尾の文才を早くから見抜いて小説の執筆を促しており、それに応えた横尾の小説『ぶるうらんど』(2008)は第36回泉鏡花文学賞を受賞した。



横尾忠則《瀬戸内寂聴》2009年
33.4×24.3cm | アクリル・布
作家蔵

三宅一生 1938.4.22-2022.8.5

衣服デザイナー

1970年、三宅デザイン事務所を設立し、1971年、ブランド「ISSEY MIYAKE」としてニューヨーク・コレクションに参加。1973年よりパリにてコレクションを発表。平面的な布と身体とのあいだに生まれるゆとりや間の関係を追求する「一枚の布」の概念をクリエイションの基礎とし、独自の素材開発やフォルムの研究へと展開するものづくりの姿勢は、ジャンルを超えて世界から注目されている。

1976年秋冬コレクションにおいて、初めて横尾忠則の作品をプリントした衣服を発表、1977年からはパリコレクションの招待状を横尾が手がけている。また、2020年には新プロジェクト「TADANORI YOKOO ISSEY MIYAKE」が立ち上がり、ISSEY MIYAKEと横尾のコラボレーションは今も続いている。



横尾忠則《ISSEY MIYAKE パリコレクション招待状 SS1988 [原画]》
1987年 | 60.2×60.2cm | アクリル・カードボード | 作家蔵

一柳慧 1933.2.4-2022.10.7

作曲家、ピアニスト

1952年に渡米し1961年までニューヨークに滞在。ジュリアード音楽院留学中にジョン・ケージとの知己を得て、前衛的な音楽活動を展開する。偶然性の導入や図形楽譜による作品を発表するほか、欧米の新しい音楽を紹介して各方面に大きな影響を与えた。

1966年、ロックフェラー財団の招聘により再度渡米。1967年9月、ニューヨークを訪れた横尾と多くの時間を過ごし、帰国後には草月会館にて一夜限りのイベント「サイコデリシャス・ショー」を開催した。

1969年にはLPレコード『一柳慧作曲「オペラ横尾忠則を歌う」』を制作。高倉健が歌う「網走番外地」の替歌「横尾忠則賛歌」や一柳のミュージック・コンクレートが収録されている。



横尾忠則《「サイコ・デリシャス」のためのポートレート：
一柳慧（草月アートセンター）》 1968年 | 103.1×73.3cm
シルクスクリーン・紙 | 横尾忠則現代美術館蔵

磯崎新 1931.7.23-2022.12.28

建築家

1963年、磯崎新アトリエを設立。手がけた建築に北九州市立美術館(1974)、つくばセンタービル(1983)、ロサンゼルス現代美術館(1986)、カタール国立コンベンションセンター(2011)など。

実作のみならず、建築を文化的、思想的に論じた著作や評論活動でも現代建築、都市計画の考え方に大きく貢献した。2019年、プリツカー賞受賞。

「Tokyo: Form and Spirit」展(1986-87年、ウォーカー・アート・センター、ロサンゼルス現代美術館他巡回)では、横尾が描いた陶板画に磯崎がフレームをつけた共作7点を出品した。

また、横尾の故郷、兵庫県西脇市にある西脇市岡之山美術館(1984)や、東京の横尾のアトリエ(1986)も磯崎の設計である。



横尾忠則《開館20周年特別展 横尾忠則展(西脇市岡之山美術館)》2004年 | 72.8×51.5cm | オフセット・紙
横尾忠則現代美術館蔵

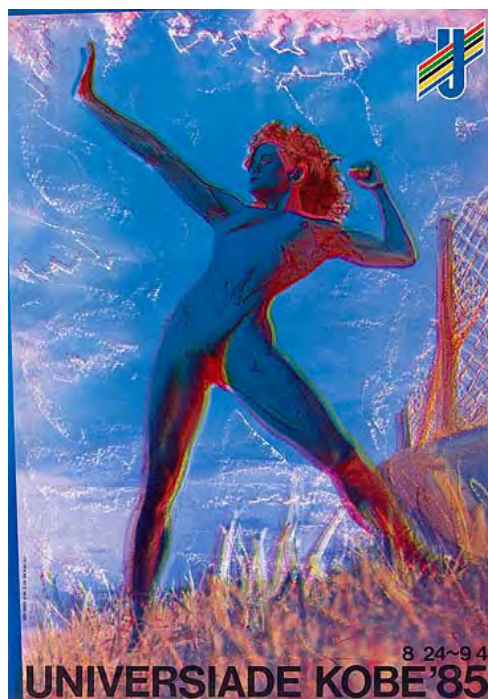
リサ・ライオン 1953.5.13-2023.9.8

ボディビルダー

1979年、第1回世界女性ボディビル選手権で優勝。女性ボディビルダーの先駆者とされ、ロバート・メイプルソープの写真のモデルとしてもよく知られる。

1984年の来日の際、日本のアーティストとのコラボレーションを希望したリサ・ライオンと横尾が出会い、森の中で全裸のパフォーマンスを撮影したものを横尾が公開制作で絵画に仕上げるといったコラボレーションが実現。以後、横尾の故郷である西脇市や神戸市でのパフォーマンスと作品制作、つくば科学万博での観覧車への立体作品設置、ハワイでの映像作品《adept arcana》制作など、二人の共作は様々なメディアに展開した。

西脇市岡之山美術館には、リサをモデルに横尾が制作した陶板壁画《LISA LYON IN NISHIWAKI, APRIL.18. 1984》が設置されている。



横尾忠則《Universiade Kobe '85(ユニバーシアード神戸組織委員会)》1984年 | 103.0×72.8cm | オフセット・紙
横尾忠則現代美術館蔵

篠山紀信 1940.12.3-2024.1.4

写真家

1961年、日本大学藝術学部写真学科在学中に広告制作会社「ライトパブリシティ」に入社、第1回日本広告写真家協会展APA賞受賞。1968年よりフリーの写真家として活動。1976年、ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館の代表作家に選出。

三島由紀夫、ジョン・レノンとオノ・ヨーコ、山口百恵、宮沢りえら時代を象徴する著名人の写真で知られるほか、移り変わる風景や建築などに目を向け、時代を切り取り続けてきた。

1964年、横尾が和田誠を誘って参加したヨーロッパへの団体旅行で、横尾は和田の同僚であった篠山と知り合う。1968年からは横尾の写真集企画『私のアイドル』のために横尾と横尾の憧れの人物を、1970年には雑誌の企画のため横尾の故郷をともに訪ねて記憶の光景を記録し、1974年には横尾の初めてのインド旅行に同行するなど、篠山は1960年代から70年代の横尾の姿を数多く撮影している。



篠山紀信《Kaleidoscope》1968年(プリント：2014年)
100.0×150.0cm | インクジェットプリント・アルミ複合板
横尾忠則現代美術館蔵

唐十郎 1940.2.11-2024.5.4

劇作家、俳優

1963年、「シチュエーションの会」(状況劇場)を旗揚げ。1964年、処女戯曲『24時53分「塔の下」行きは竹早町の駄菓子屋の前で待っている』より唐十郎の筆名で執筆。1967年、新宿花園神社境内にて仮設の「紅テント」での公演を開始し、国内外で精力的に活動。1988年に状況劇場を解散し、1989年に劇団「唐組」を旗揚げする。主な著作に『少女仮面』(1969)、『泥人魚』(2003)など。小説『佐川君からの手紙』(1982)では芥川賞を受賞した。

横尾に唐十郎を紹介したのは寺山修司であった。出会いから数日後、唐は電話で公演「アリババ」のチラシを依頼したという。横尾が状況劇場のためにデザインした「ジョン・シルバー」(1965)、「腰巻お仙・忘却篇」(1966)、「由比正雪」(1968)、「続ジョン・シルバー」(1968)のポスターは、横尾のグラフィックデザイナー時代の代表作となっている。



横尾忠則《腰巻お仙(劇団状況劇場)》1966年
103.2×72.2cm | シルクスクリーン・紙
横尾忠則現代美術館蔵

タマ -2014.5.31

横尾家の猫

1999年8月に愛猫バーゴとミネを相次いで亡くし、喪に服していた横尾のもとに、2002年、野良猫が現れる。まもなく「わが家の野良猫」として横尾家に迎えられ、「タマゴ」と名付けられたその猫は「タマ」と呼ばれ、行方不明になったり怪我や病気で入院したりと、横尾の日常に小さな事件を起こしていく。

タマのわがままで自己に忠実な生き方から、横尾は芸術家としてあるべき姿を学んだという。

2014年5月31日深夜、タマ死去。横尾はその最後の姿をキャンバスに写し取った。

以後2020年まで、在りし日のタマの写真をもとにタマを偲んで描いた絵画は91点を数える。



横尾忠則《タマ、帰っておいで 005》 2014年
38×45.5cm | アクリル・布
横尾忠則現代美術館蔵



横尾忠則《黒い空洞》 2014年
130.3×162.1cm | アクリル・布
横尾忠則現代美術館蔵

YOKOO TADANORI COLLECTION GALLERY

特集: アンディ・ウォーホル 1928.8.6-1987.2.22

2021年に新設された横尾忠則コレクションギャラリーは、従来のアーカイブ資料のみならず、作家の手もとにある多彩なコレクションを様々な角度からご紹介することで、横尾作品の奥深さを少し変わった視点からお届けすることを目的としています。

今回は、企画展「レクイエム 猫と肖像と一人の画家」と連動し、横尾と交流のあった作家、アンディ・ウォーホルを取り上げます。

横尾が初めてウォーホルに会ったのは、1967年。「ファクトリー」と呼ばれる彼のスタジオの薄暗い部屋で、サングラスをかけてシルクスクリーン作品を制作する様子を目撃し、横尾は発行されたばかりの自身の画集を手渡したといいます。その数年後には新しいオフィスに再びウォーホルを訪ね、ミック・ジャガーの肖像を2点、直接購入しています。

本展では、横尾の自宅に飾られているウォーホル作品4点に加え、横尾がウォーホルをモチーフに描いた60点組のシリーズ《A.W.Mandala》より、2023年に当館に寄贈された57点を一挙公開いたします。



横尾忠則《A.W.Mandala》2019年
各41.0x31.8cm | アクリル・布 | 横尾忠則現代美術館蔵
※写真は2019年の展示風景。本展では60点中、当館蔵の57点を展示

関連イベント

キュレーターズ・トーク

■担当学芸員が展覧会の見どころを分かりやすく解説します

講師 当館学芸員
日時 10月26日（土）、11月30日（土） ※いずれも 14:00—14:45
定員 50名（先着順）
集合場所 当館オープスタジオ
参加費 無料、ただし要展覧会チケット（高校生以下 入場無料）

2時間耐久ギャラリートツアー

■担当学芸員と会場を巡りながら、約2時間かけて、じっくり作品を鑑賞します

講師 当館学芸員
日時 11月10日（日）、12月8日（日） ※いずれも 14:00—16:00
定員 15名（先着順）
参加方法 下記をご明記のうえ、Eメール（staff@ytmoca.jp）にてご予約ください
①代表者名 ②参加人数 ③電話番号
空きがある場合は、当日のご参加も可能です
参加費 無料、ただし要展覧会チケット（高校生以下 入場無料）

※その他のイベント情報については当館ホームページをご覧ください

展覧会ガイドブック

レクイエム 猫と肖像と一人の画家

■本展の主な展覧会出品作品をカラーで掲載したガイドブック

A4判変形 80頁
2024年9月14日発行予定



基本情報

レクイエム 猫と肖像と一人の画家

2024年9月14日(土)―12月15日(日)

開館時間 10:00―18:00 ※入場は17:30まで

休館日 月曜日

※ただし9月16日(月・祝)、9月23日(月・振休)、10月14日(月・祝)、11月4日(月・振休)は開館、
9月17日(火)、9月24日(火)、10月15日(火)、11月5日(火)は休館

出品点数 約350点(コレクションギャラリーを含む)

主催 横尾忠則現代美術館([公財]兵庫県芸術文化協会)

助成 一般財団法人 地域創造

協力 **ホテルオークラ 神戸**

観覧料 一般 700(550)円、大学生 550(400)円、70歳以上 350(250)円、高校生以下無料

※()内は20名以上の団体割引料金

※障がいのある方は各観覧料金(ただし70歳以上は一般料金)の75%割引、

その介護の方(1名)は無料

※割引を受けられる方は、証明できるものをご持参のうえ、会期中美術館窓口で入場券をお買い求めください。

兵庫県立美術館との相互割引

・兵庫県立美術館の特別展またはコレクション展のチケット半券のご提示で、当館企画展を団体割引料金でご覧いただけます

・当館企画展のチケット半券のご提示で、兵庫県立美術館の特別展またはコレクション展を団体割引料金でご覧いただけます

※会期中のチケット半券に限り有効です

お問合せ

横尾忠則現代美術館

〒657-0837

兵庫県神戸市灘区原田通3-8-30 [兵庫県立美術館 王子分館]

tel. 078-855-5607(総合案内) fax. 078-806-3888

学芸担当: 平林 恵<hirabayashi_megumi@ytmoca.jp>

広報担当: 早水千尋<hayamizu_chihiro@ytmoca.jp>

※画像データは当館ウェブサイトのプレス専用ページ(<https://ytmoca.jp/press>)からお申し込みいただけます